

第 65 回 国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

白百合学園中学校 3 年

澤田 涼那

課題②

複数の国で協力して、取り組むべきと考える優先課題は何か。

副題

なし

教育は国や社会の未来を形づくる基盤であり、国際理解や平和を築くうえで欠かせない。だから私は、複数の国で協力して取り組むべき優先課題は「教育」であると考えている。

まず、教育は貧困や環境問題、格差などの課題を解決する力の源になる。私が調べて心に残ったのは、国連が掲げる持続可能な開発目標の中で「教育」が独立した一つのゴールとして掲げられていたことだ。さらに「教育こそ他の目標を達成するための土台」とされており、教育がすべてを支える基盤だということに強く納得した。またユネスコも「平和は教育から始まる」という思いを掲げ、教師の養成や学校づくりを進めている。こうした活動を知って、世界には教育の力を信じて奮闘している人がいるのだと心強く感じた。一方で、まだ道半ばで、多くの子どもたちが教育を受けられない現実があることも痛感した。教育を受ける機会が限られている地域では、貧困が次の世代へと受け継がれてしまう。逆に教育が広がれば、人々は仕事を心得て生活を改善し、環境や健康に関心をもつきっかけが生まれる。だからこそ教育の協力は、単に知識を与えるだけでなく、社会全体を支える力になるのだと思う。

次に、教育は平和な世界への鍵になる。平和のための努力は世界中で行われているが、戦争はなくなる。また、過去の戦争が火種となる問題も多い。例えば、日本と中国、日本と韓国の間には、戦争や植民地支配の影響が今も残っている。戦争を知らない私たち世代も、その問題を抱えている。メディアや政治家の発言の中には、過去の感情を刺激するものもある。過去の出来事による新たな不幸を生み出さないために、教育によって正しい方向性を示さなければならないと思う。

複数の国が教育面で協力している例として、ヨーロッパではすでにフランスとドイツが共同で歴史教科書を作り、互いの高校で使っているという事例がある。国が異なれば歴史の見方や表現も変わる。だ

からこそ、複数国で協力して教育をつくれれば、偏りを減らし、共通理解を築きやすくなる。そして重要なのは、教科書を作って終わりではなく、それを活用して学校同士がつながり、ケーススタディを通じて生徒一人一人が意見を交換する場をもつことだ。そうした共に学び合う経験そのものが、偏見を和らげる力になると思う。

私がこの考えを強くしたのは、日中韓子ども童話交流会に参加した体験がきっかけだった。私は小学生の時に読書感想文で文部科学大臣賞をいただいたことで、この交流会に参加する機会を得た。交流会に向かう前の私は、歴史問題が解決していない現状を思うと、中国や韓国の子どもたちが日本にどんな感情を抱いているのかと、少し不安だった。しかし、実際に出会ったのは笑顔で手を振ってくれる同世代の仲間だった。言葉の壁はあっても、物語を工夫しながら紹介し合い、手作りの旗で応援し合った。次第に私の緊張はすっかり消え、笑い合いながら学び合う時間を心から楽しんだ。また、同じテーブルにいたOBたちは交流を続けており、昔からの友達のように自然に語り合っていた。その姿から、交流は一度きりではなく、つながり続けていくこそが大切だと学んだ。私はこの交流を受け継ぎ、未来へつなげていきたいと思った。

戦争によって受けた傷は消えない。その傷は忘れるのではなく、次の世代へ受け継いでいくべきだと思う。しかし、未来の世代が誤った感情を持つことは、教育の在り方を皆で協力して考えることで減らしていきたい。そして私は、異なる国の人と共に学び合い、交流をつないでいく一人になりたい。複数の国が協力して築く教育こそ、国や文化の違いを超えて「共に生きる世界」への確かな道しるべになると、私は強く信じている。